HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	書評　船岡誠『道元〈ミネルヴァ日本評伝選〉』
著者	追塩，千尋; OISHIO, Chihiro
引用	年報新人文学(11): 270-275
発行日	2014-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

船岡　誠　著
『道元〈ミネルヴァ日本評伝選〉』
（ミネルヴァ書房、二〇一四年）

追塩　千尋

一

本書は、中世から近世初頭の禅宗史研究にすぐれた成果を上げておられる著者による道元伝である。道元については、氏は既に『道元と『正法眼蔵随聞記』』（以下『前著』、評論社、一九八〇年）という専著を出している。本書は『前著』を基礎にしながらも（実際本書との同文は結構目立つが）、氏自身の『日本禅宗の成立』（一九八七年、吉川弘文館）やそれ以後の他氏の研究成果を取り入れた最新の道元伝といえる。巻末の豊富な参考文献一覧に、今日までの主要研究の動向がうかがえる。

本書の構成は次の通りである（細目略）。

はしがき
第一章　紳纓の胤
第二章　興禅の秋
第三章　入宋求法の旅
第四章　大事了畢
第五章　深草閑居
第六章　弘法救生（「救」が「求」と誤植されている）
第七章　一箇半箇の接得
あとがき、参考文献、略年譜、人名・事項索引

禅宗においては、使用される語の読みが特殊で、その意味などを理解するのが容易とはいえず、難解な部類の宗派といえよう。本書の章題の表現にもその一端が現れており、一・四・七章などは章題だけでは内容が想像しにくいかもしれないし、本文において改めて著者による説明がされているわけでもない。しかし、本書がその点で特異ではないようである。本書に先行する代表的道元伝の一書である竹内道雄氏の『道元〈人物叢書〉』（一九六二年初刊、一九九二年新稿版、吉川弘文館）の新稿版の目次を参考までに次に示しておく。

第一「おいたち」、第二「求法の志」、第三「身心脱落」、

第四「弘法救生」、第五「一箇半箇の接得」、第六「寂後の僧団」（旧版では第六相当の章はない）

四・五章が本書と同タイトルであることも含めて、全体的に類似していることが看て取れよう。

なお、本評伝シリーズではその人物の代表的言葉が表紙に書かれるが、本書は「道は無窮なり」（『正法眼蔵随聞記』一の五）が選ばれている（表紙及び一四二頁）。『正法眼蔵』「現成公按」にみえる著名な「仏道をならふといふは、自己をならふ也」という言葉は著者も道元禅の凝縮・神髄とされているが（一二八・一二九頁）、その言葉ではないところに、著者の道元への思いがうかがわれ、人生訓としては味わい深い言葉といえよう。

次に本書の内容を簡単に紹介したい。

二

「はしがき」では、近代における思想家としての道元、曹洞宗宗祖としての道元、という二つの研究動向に触れ、本書はそのどちらの立場もとらず「鎌倉時代の一宗教家」としての道元をみる、という著者の立場が述べられる。近代の道元研究の動向は、法然・親鸞・日蓮などとともにそれ自体興味深いものであることが知られる。別の機会に改めて論じていただきたいテーマであると感ぜられた。

第一章の「紳纓の胤」とは、『元亨釈書』巻六の道元伝で使用されている表現で（通常は「纓紳」）、高位高官出身という意味で、本章では貴族出身とされる道元の出自に関することが検討される。ここでは父は源（久我）通親か通具のいずれか、母も藤原（松殿）基房の女らしいと推定できるだけで確定はできないとする。また、出家の動機は八歳で母を亡くしたことによるとする道元の主体性もさることながら、当時の貴族社会の慣習ともいえる他律的側面にも注意を喚起する。なお、栄西と道元相見の実否については、『前著』の不備が述べられ、明言されてはいないが相見否定説に立つ。

第二章は叡山修行中に生じた疑問に対して、公胤により入宋し禅を学ぶことを勧められた経緯等が述べられる。公胤について頁を割いて踏み込んだ伝記の考察が行われ、禅が勧められたのは唐突なことではなく、天台の構成要素の一つとしての禅があったことと古代からの禅の伝統について改めて注意を促す。

第三章は入宋した道元が老典座により「生活即修行」であることに気づかされる著名な体験、嗣法の書としての嗣書への憧憬、天童山の無際了派のもとでの修道生活、無際

の死により「大事決択」のため諸山巡歴の旅に出かけるに至る様子が述べられる。

第四章は道元の禅に決定的影響を与えた如浄との出会い、如浄のもとでの厳しい修行を通じて求道の思いを新たにする道元が描かれる。ここでは如浄からの個人指導の記録ともいえる『宝慶記』の内容が紹介され、如浄への参禅により身心脱落（悟り）を得たのは宝慶二年（一二二六）であるとし、『前著』で提唱した宝慶三年説を訂正する。この章から最後の章までは伝記的側面よりも道元の思想を語ることに重点が置かれる。

第五章は正法を体得して帰国した道元は一時建仁寺に入るが、やがて深草に移り道元禅の基本がうかがえるとされる『正法眼蔵』「弁道話」が執筆される経緯などが述べられる。深草に移った理由については主要三説（建仁寺腐敗堕落、叡山圧迫、如浄示寂による心理的変化）を批判的に検討し、外的要因よりも「弘法救生」実現という内的要因を重視する。

第六章は初期道元教団の形成期である深草の興聖寺時代（一二三三～一二四三）が述べられる。この時期は道元が主著『正法眼蔵』の示衆・執筆に精魂を傾けた重要な時期でもあるためか、本書ではもっとも頁が割かれている。この時期の注目すべきことを列挙するなら、道元禅の核心が形成され只管打坐の浸透がはかられたこと、道元禅の後継者となる懐奘の入門と『正法眼蔵随聞記』の執筆が開始されたこと、男女平等論の立場から女人禁制・女人結界論への批判がなされたこと、達磨宗からの集団入門があり遁世者集団としての僧団が充実したこと、などである。

終章である第七章は、まず興聖寺から永平寺への移住理由については、外的要因よりも道元の自発的選択という内的要因の方が重視されているようである。入越後の特色として、臨済系宗風の払拭、在家成仏の否定、鎌倉行化により一箇半箇の接得（＝不離叢林）の立場が強調されたこと、が述べられる。最後に議論が多い『正法眼蔵』の七十五巻本と十二巻本との関係について、諸説を紹介・検討したうえで両者は道元の思想の変化というよりも説き方の変化の反映と見ている。

以上が本書の概要である。道元の伝記・思想上の論点がわかりやすく紹介された書になっている。なお、本書では人間道元の一面として、論理好き（三十七頁）・高飛車（六十一頁）・得道最優先（同）・多弁で自信家（六十五頁）・驕慢心（七十一・七十六頁）・無礼（七十六頁）といった指摘がなされ、興味がひかれる。それらは修行の過程にお

ける若かりし時の道元の性格や態度として語られているが、貴族という俗系から抜け切れない道元の一面がうかがわれる。多少せっかちで怒りっぽい性格でもあったようであるが、得道後それらの「欠点」は克服されたのかどうか気になるところではある。

次に本書の特徴的なことを課題も含めて述べたい。

三

第一は、本書は「一宗教家」道元を描くとされるが、結果として「思想家」道元が描かれている。四章以降の記述が思想中心であることがそのことを物語る。そのためか、道元の伝記や宗教活動に関する記述が全体として物足りない感は否めない。宗教家として描くには、道元の宗教基盤ともいうべき点についての目配りが必要と思われる。例えば、第五章で建仁寺から深草への移動理由の考察はなされるが、深草という場の特性などの説明はなされない。また、第六章の勧進活動による興聖寺建立についても、その勧進の具体的様相が知りたいところであるが、史料的制約もあってかほとんど述べられない。

こうした注文めいたことを述べたのは、禅宗を時代や当時の宗教界の中にどう位置づけるか、という事ともかかわるからである。著者は第二章で天台の一構成要素としての禅や、古代からの伝統を持つ通仏教的な禅について説明し、禅の持ついわば普遍性を強調する。その視点を道元の宗教活動を語る中でもっと生かしていただきたかった。道元の同時代人として明恵については多少触れられているが、親鸞や少し後の日蓮も名は出されるが念仏・法華に対して道元はどう対応したのか、神祇観はどうであったのか（これらは道元の宗教の成立基盤の問題ともいえる）、といった鎌倉仏教における道元の位置の明確化により「宗教家道元」を浮き彫りにしえたと思われる。

第二に、第一の点をひとまず置くとして、本書を結果的にせよ「思想家道元」が描かれた書としても、配慮を求めたい点がいくつかある。まず、本書の一つの特色は、原典が本書の随所で引用されていることである。それは原典をして道元の思想を語らせる、という著者の方針と思われる。その結果、時間の経緯を追いながら道元の思想の変化をたどることが出来、その点で効果的である。ただ、引用の数が多く（特に四章以降）、そのたびに立ち止まらされ思考の停止を余儀なくされることも事実である。また、引用の仕方は原文・口語訳・要約的意訳など様々であり、原文のみを示し解釈などを読者に委ねている感がある箇所も

少なからず見受けられる。例えば、道元は「禅を小乗・声聞とする批判」に対して如浄の見解を求める部分は、如浄の見解が原文のみで示されその解説がなされていない（八十七～八十八頁）。本書が一般の読者も対象にしていることを踏まえるなら、一工夫欲しいところである。ちなみに、この点は『前著』ではわかりやすく説明されていた（『前著』六十七、一九八頁）。第七章の「一箇半箇の接得」の意味についても同様で、道元が宋からの帰国に際して如浄が語った言葉として紹介されるが（一〇一頁）その説明はなく、不離叢林と同義であることが示される（一九九頁）ことで終わっている。

禅関係の用語は読み方も含め意味が難しいことを前述したが、専門家には自明なことではあっても門外漢・一般読者への配慮が求められよう。

五十四歳という道元の生涯は、鎌倉期においては短くも長くもないほどほどの期間といえよう。本書の本文は二一八頁であるが、道元という巨星の生涯や思想を過不足なく叙述するには十分とはいえない頁数と思われる。頁数については出版上の制約や著者の事情などによるものであろうが、同シリーズの佐藤弘夫『日蓮』の本文部分が三二三頁と本書より百頁も多いことをふまえるなら、それだけの頁が加えられたなら右記に記した注文はかなり解消されたものと思われる。

第三として、本書の体裁にかかわる点に触れておきたい。目に付いた誤植などは、五十七頁四行目「だか」→「だが」、同七行目「一分始終」→「一部始終」などは些細なものであるが、第六章の章題「弘法救生」が「弘法求生」となっているのは看過し得ない。目次及び第六章の柱部分の章題も最後の頁まで「救」部分が「求」になっており、非常に目立つ。これは著者のみならず編集・校正担当者の責任というべきで、出来るだけ早く訂正すべきであろう。

また、誤植ではないが、八十五頁十五行目の「道う」には「道う（いう）」、一四二頁一行目の「出来る」に「出来る（いできた）」とルビを付けた方が親切であろう。また趙州従諗（じょうしゅうじゅうしん）の生没年は七七八～八九七年であり、一二〇歳の長寿を保った僧である（一四五・一六九頁）。通常、七七八～八九七年という生没年を見たとき何かの間違いでは、と思うであろう。そうした誤解を受けないように「一二〇歳の長寿を保った僧」といった一文を付した方が良いであろう（一六九頁を注意深く読めばそのことは理解し得るが）。さらに、略年譜部分であるが、中国年号を入れる時には括弧に入れるなりして和暦と区別が付け得るような処置が必要である。特に宝慶

部分は『前著』ではきちんと処理されていたが、今回の本書では混乱を招きかねない記載の仕方になっている。

評者は著者と同じく仏教史を学びながらも、禅宗史にまったく疎いだけに適切な書評とはならなかったことをお詫びしたい。禅における得道（悟り）は個人的体験で、第三者は共有しがたいものである。他宗派もその点では大同小異かもしれないが、禅は特にその感が強い。そのため近寄り難いのであるが、禅の悟りの世界に分け入らなければ真の理解には至らないと思われる。難解な『正法眼蔵』を読み解き、道元禅の世界に私たちを導いてくれる有益な書として今後本書を読み継いで行きたい。

（おいしお　ちひろ・北海学園大学大学院教授）